

元日に発生した「能登半島地震」から3週間余りが経ちました。1月21日(日)時点で、亡くなられた方が災害関連死を含んで232人、安否不明者が22人、避難者が1万5千余人となっています。亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、避難生活をされている皆様に心からお見舞いを申し上げます。

9日(火)始業式、22日(月)全校朝会での校長講話では「能登半島地震」について触れました。広島にいる私たちができることは何かと共に、「備えあれば憂いなし」について話しました。また、今を大切に生きることがいかに意味あることなのかについても。いつなるとき、災害に遭遇するとも限らない。日々の生活、家族や友だち、想いを込めて取り組んでいることなど、心残りがないようにしようじゃないか、と。

(右の写真は、大学入学共通テスト受験者の激励会の様子)



「愚か」であれ

1月18日(木)付の中国新聞朝刊に以下のよ
うな興味深いコラム(「潮流」漆原毅氏記載)を見
つけました。そのままを記します。

「空飛ぶクルマ」の展示場が昨秋、倉敷市にオープンした。国内で初めて屋外の有人飛行を成功させた一般社団法人が運営し、地域の期待を集めている。

初めて空を飛んだ日本人は玉野市出身の表具師、浮田幸吉とされる。江戸期の1785年、竹を骨組みにした翼を携えて岡山城近くの橋から飛んだ。長くは飛べなかったが、ライト兄弟の初飛行より118年も早い。なのに騒ぎを起こしたかどで、岡山を追われた。

同じ空を飛ぶ試みなのに、展示場と幸吉の境遇は全く違う。長い年月がたち、ビジネスの将来性が共有されたから、当然ではある。

時代は変わった。だが、われわれの内面は変わっただろうか。幸吉のようなとっぴな行動を異質と断じ、遠ざけようとする性分は、今も同じように見える。

幸吉が橋から飛んだ時、国や藩がその発想と情熱を評価し、支援していたら、この地で飛行技術が育まれた可能性はないだろうか。

米アップルを世界最大のIT企業に育てたスティーブ・ジョブズは米国の大学の卒業式で講演し、「ステイ・フリーッシュ」と呼びかけた。「愚かであれ」「分別くさくなるな」などと訳される。

激しい言動で知られるジョブズがもし日本に生まれていたら、iPhone(アイフォーン)を生み出せただろうか。事業化するための仲間や資金を得て、行政の規制や周囲のやっかみを乗り越えただろうか。残念ながらサクセスストーリーは想像し難い。

実は身近に、すごい才能を持ちながら、変わり者扱いされたまま生涯を終えた人がいたかもしれない。日本がこのまま貧しい国になっていくのを食い止めるポイントの一つは、異能を受け入れる度量だと思う。

まさにその通りであるとしか言いようがありません。人と違うことで奇異な目で見られたり、

周囲と同じでなければ認められなかったり、場合によってはあからさまに排除されることもあったりします。「出る杭は打たれる」とか「同調圧力」といったようなものは、あちこちで散見されます。やはり、こうしたことは日本の文化とか慣習?で、避けられないことなのでしょう。

”個性尊重”という言葉は随分と久しく、私が教員になった40年前、「あたかも金太郎飴をつくるかのような学校は、もはや時代錯誤も甚だしい」と叫ばれていましたが、現実はどうのような変化を遂げているのでしょうか。最近では”個別最適化”などと言われ、生徒一人ひとりの個性や能力に合わせ、それらをいかに育てることができるかということが問われています。

昨今、加速度的に生成AIが身近になりつつあります。論理的で合理的な分野においてはこのAIは人間より有能でしょう。しかし、こんな時代にこそ主体的思考力と行動力を持ち合わせた人間が求められるはず。決して「同調」が正義の時代ではありません。多様性を真から認め合い、違いを受け容れることができる人間にならなくてはなりません。そして、自分の個性を発揮したい、自分の殻を破ってみたいと思う人間を育み、合わせて、他者への気遣い心遣いができる人間を育てなくてはなりません。やがて多様な人々が支え合う社会を構築することに繋がるはず。

本校が2015年に広島修道大学の附属校となって9年目、途中、19年に「ひろしま協創」と校名を変えて6年目を迎えます。「協創」という「多様な人々が協力し合い、新たな価値を創る」という学校理念の再確認を新年度の最優先課題にします。

それは、一面で「異能を受け入れる度量」を高めることにほかなりません。今学期を準備期間とし、新年度をスタートさせます。